

ストラスブール、ノイシュタットへの 世界遺産エリア拡大プロジェクト にみえる課題

——受容へと向かう潮流と登録後の問題——

黒田 真平

本修士論文の目的は、フランス、ストラスブール (Strasbourg) の世界遺産について、1988年に世界遺産に登録されたストラスブールの旧市街にあたるグランデイル (Grandle) から、1871年から1918年のアルザス (Alsace) のドイツ併合の間にドイツによって建設された新市街であるノイシュタット (Neustadt) まで、世界遺産の登録範囲を拡大しようというプロジェクトが、市、住民双方から歓迎され、進められるという一連の大きな流れになる中で、それぞれの立場の思惑の違いから生じる登録後の問題を考察するということである。

この目的を達成するため、先行研究、文献から得たデータをもとに、まず仮説を立てる。それは市の責任者や市の専門家によるノイシュタットに関わる言説が、市によって行われるディスカッション、説明会、教育の場を通して人々に伝わり、ノイシュタットの世界遺産登録への全員賛成という同一の意見、同一の流れを作り出しているのではないかと言う仮説である。フーコーの言説をめぐる理論が枠組みとなっているこの仮説の検証を2015年1月から3月の間のフィールドワークの結果をもとに行っていく。

まずストラスブール市の世界遺産登録をめぐる動きについてみていく。ストラスブールのグランデイルの世界遺産への登録は1988年のことであつた。しかし当時作り上げられた文書は時がたつにつれ、ユネスコによって定められた規範にそぐわなくなつてきてしまう。この状況下において、2005年に出された定期報告書で特に問題とされたのは、顕著で普遍的価値として現在認められている歴史的一貫性は、19世紀と20世紀の遺産を考慮に入れなければ完全性においても真正性においても評価され得ないことであつた。この問題を中心として、ストラスブール市は運営計画書の提出を余儀なくされている。

この状況を踏まえた上で、先行研究の問題点について分析する。ノイシュタットの価値に関する先行研究のうち、他の先行研究と異なる価値の分析を行ったのが Eberhardt 氏であつた。彼女はノイシュタットを、観念的価値、技術的価値、美的価値、歴史的価値、連続的価値の5つに分けて分析する。この分析のうち特徴的なのが連続的価値である。この連続的価値は、ノイシュタットが、グランデイルとの関係において、ストラスブールの連続的な風景の構成に含まれているというものである。ここで注目したいのが、連続的価値の語り手が主に市に関係する人物であるということである。加えて、前述の通り市は、遺産としての完全性、真正性を示すために、20世紀に作られた遺産を考慮にいれなければならないとなつていたという点をあわせ、論文では一つの推測をたてる。すなわち、特徴的なノイシュタットの連続性という価値は、現在登録されているグランデイルのものも含めて、ストラスブールの世界遺産を運営するために市が見つけた言説なのではないかという推測である。

ここで、理論としてのフーコーの言説についてみていく。フーコーの言説に関わる議論を分析し、言説の定義付けを始めて行い、次いであるものが言説におかれることで力関係が生じること、言説に従い、権力が現

れるとともにこれが言説を増やし、強化することについて述べていく。そして権力の効果として同一化の効果があることを示した上で、ノイシュタットの世界遺産登録をめぐる意見に反対意見が生じないことについて、一つの仮説をたてる。それは、ノイシュタット、特にその連続的価値に関わる部分が市の政策により言説に置かれ、市の責任者及び市が抱える専門家によって、ノイシュタットに関わる言説は増やされ、強化され、そしてその力がノイシュタットをめぐる言説を個人として同一化していったからではないか。つまり、市の責任者や市の専門家によるノイシュタットに関わる言説が、市によって行われるディスカッション、説明会、教育の場を通して人々に伝わり、ノイシュタットの世界遺産登録への全員賛成という同一の意見、同一の流れを作り出しているのではないかと言う仮説である。

続いて2015年1月28日から2015年3月16日のまでの間、フランス、ストラスブール市において行われたフィールドワークについて仮説を踏まえた分析を行う。仮説の検証にあたり、論文はインタビュウのうち市のプロジェクト責任者であるCassas氏、プロジェクトの研究に関わっていたEberhardt氏、Eberhardt氏の紹介でインタビュウを行ったノイシュタットの住民のB氏の意見を取り上げている。まず、Cassas氏のインタビュウの内容から、グランデイルからノイシュタットに向かう連続性に彼女が注目していること、市民調査や説明会を繰り返していることを取り上げ、市が主体となつて連続性の言説を住民へと伝え、影響を及ぼしている可能性について指摘する。続いて、Eberhardt氏の、住民のノイシュタットに対する無知や、議論や見学会によって住民にノイシュタットの価値を伝えているという話から、ノイシュタットについて知識のなかった住民にその価値を伝えている状況を見出す。そして最後に、B氏のインタビュウにおいて、彼が自身の住んでいるノイシュタットの価値についてはほとんど知らなかったという状況から、市の説明会によってその話に共感す

るようになる過程が明らかになったことで、仮説のように、少なくとも一部の住民において、連続性の言説が、説明会などを通じて伝わり、意見を同一化させていることを証明している。

しかしながら、仮説にあわない2つの別の立場があることもインタビュウによって明らかになっている。1つ目の立場は、遺産保護団体に所属するD氏とSociété des Amis du Vieux Strasbourg、略称A V Sに所属するR氏へのインタビュウにみられる。D氏はまず、ユネスコ世界遺産の拡大計画について、賛成であるが、ユネスコが保護を直接行わないことを危惧していた。市が短期の利益をとって土地の購入や建築に関わるプロモーターの提案を全て了承している問題を挙げ、プロモーターの動きを制限する必要があるという立場に立っている。また彼はノイシュタットの計画がプロモーターの活動の制限につながることを期待している。

2つ目の立場はA V Sに所属しているQ氏の意見にみられる。インタビュウの中でQ氏はフランス人とアルザス人を明確に分けて語っており、中央、パリの権力に対する反対の立場に立っていた。その上で、ノイシュタットの拡大計画については、拡大計画が認められれば、地方の力を具体化し、地方の権力を訴えることができると賛成の立場に立つ。

以上の、仮説とは異なる2つの意見を挙げたところで、ノイシュタットのプロジェクトに反対する意見が小さくなっている別の理由について言及する。それは反ドイツ感情の薄れである。反ドイツ感情は、第二次世界大戦のナチスによる占領の悪感情との混合によって生み出されたものである。この感情は1950年代のPalais du Rhinの取壊し計画を後押しし、1960年代のノイシュタットを歴史的建造物に登録しようという運動を中止にした原因になるなど、ノイシュタットに対して少なからぬ影響を与えていた。しかしながら、インタビュウを通じ、1945年から1970年頃までは存在したドイツへの悪感情は70年頃から世代が変わり、戦争の記憶

とともに薄れていったことが明らかになる。

続いて論文の目的の達成に迫る。それは先の結果の分析を踏まえ、次のようになる。

反ドイツの感情は世代の交代と共に薄れ、ノイシュタットの歴史を知らない、あるいはそれに関心がない住民が増える中で、新たにノイシュタットを世界遺産の範囲に含めようというプロジェクトが立ち上がる。このプロジェクトは、グランデイルからノイシュタットへの連続的価値の言説を掲げる市によって、説明会や議論の場、教育の場を通じて住民に伝わっていき、住民の一部はこの言説を受け入れ、あるいは共感して市の立場と同一化していく。また、独自の立場から遺産を保護しようとしていた人達も、プロモーターの開発に対抗できるというメリットからプロジェクトに賛同する。他にも、県の再編に危機感を感じていた人々も、アルザスのシンボルとして、国に地方の力を訴える手段としてプロジェクトに賛同していく。このような経緯を経て、ノイシュタットを世界遺産に加えるプロジェクトは、市、住民双方から歓迎され、進められる一連の大きな流れとなったのである。

本論の目的を明らかにしたところで、最後に、プロジェクトが成功し、ノイシュタットが世界遺産として認められた後に起こりうる2つの問題について、可能性として提示する。

一つは、プロモーターの抑止をしたいという立場から考えられる問題である。それはノイシュタットが世界遺産に登録されたとしても、その保護範囲内において、グランデイル内での改築のようなプロモーターの活動を市が許してしまえば、プロモーターを抑えたいがゆえに計画に賛同していた人々は、市に反対していく可能性があるということである。

もう一つは、アルザスの力を示すシンボルとしてノイシュタットを世界遺産に登録したいと考える立場からの問題である。市が現在世界遺産とし

てのストラスブル、その歴史的一貫性を示すためのグランデイルとノイシュタットの連続性に重点を置いている以上、市の対応は不透明であるため、場合によってはノイシュタットのあり方をめぐる対立が起こる可能性がある。

このように、現在ほぼ全ての住民に受け入れられているノイシュタットへの世界遺産登録範囲拡大プロジェクトであるが、その中にはいくつかの問題の種が潜んでいる可能性がある。短い調査期間であったために、明確に問題になると示すことはできないが、ノイシュタットのプロジェクトをめぐる今後の問題となりうる一つの可能性として、論文の最後にこれらのことを提示しておく。